

ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察

—ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて—

(その2)

真 鍋 周 三

目 次

(その1) (『神戸商科大学創立80周年記念論文集』に掲載済み)
はじめに

- I ペルーにおける原住民問題考察の留意点
 - 1. 先スペイン期から植民地時代にかけて
 - 2. 独立から 1920 年代まで
 - 3. センデロ・ルミノソの台頭とフジモリ政権による国家テロリズムの出現
- II 中央セルバの原住民とその社会—現フニン県のアシャニンカの場合を中心に—
 - 1. 中央セルバの原住民
 - 2. 修道会の進出期 (1635 年から 1742 年まで)
 - 3. フアン・サントス・アタワルパの反乱による入植活動の中止 (1742 年から 1847 年まで)

(その2) (本稿部分)
4. 入植活動の再開 (1847 年から 1940 年頃まで)

- III 中央セルバにおけるさらなる問題の発生 (1940年代以降)
 - 1. 1940 年代以降のペルー社会の「チョロ」化現象 (人口の国内移動)
 - 2. 政治的急進化
 - 3. ベラスコ軍事政権以降

IV 結び

付 録

参考文献

はじめに

ペルー共和国の首都リマ市において発生した日本大使公邸占拠事件—ペルー・フジモリ政権下で起きた「トゥパック・アマル革命運動 (Movimiento Revolucionario de Túpac Amaru. 以下MRTAと略称する)」による在ペルー日本大使公邸占拠事件。1996年12月17日から翌年の1997年4月22日まで127日間にわたって続いた—から早くも10年以上が経過した。この事件発生直後、日本の報道機関において「トゥパック・アマル (Túpac Amaru)」なる用語の意味がよく分からないとの声が聞かれたが、これは植民地時代18世紀ペルー、現クスコ県を中心に大反乱 (トゥパック・アマルの反乱) を指揮した反乱者の名前 (本名ホセ・ガブリエル・コンドルカンキ (José Gabriel Condorcanqui) は自ら「トゥパック・アマル」と名乗って反乱軍を指揮した) からとられている。現代ペルーにおいて18世紀のこの「トゥパック・アマル」は、「ラテンアメリカ独立の先駆者」としてペルー史上位置づけられ、国民的英雄として知られる。またそれは16世紀最後のインカ王の名前でもある。1996年12月17日、14人からなるMRTAのゲリラ戦士が、在ペルー日本大使公邸において行われていた天皇誕生日祝賀パーティーの会場を襲撃し、会場にいた600人あまりを人質にとり、フジモリ政権に対して次の4項目を要求したとされている。①ネオリベリズム (neoliberalismo. 新自由主義) の経済モデルに基づく経済政策の変更、つまり経済政策の方向を、圧倒的多数者の福祉を重視するモデルに変えること、②刑務所の人権問題の改善、MRTA同志およびMRTAに属するとして収監されているすべての服役囚の釈放、③日本大使公邸を占拠した部隊と、MRTAの政治犯同志すべてを中央セルバに移送すること、④戦争税を支払うこと、である。これらの要求の前提としてMRTAは「捕虜とした人びとの物理的・精神的安全を保障する」と約束。この約束は守られ、占拠作戦を展開中MRTA側はひとりも殺傷者も出さなかった。今回の軍事行動は、「フジモリ政府 (Gobierno de Fujimori, 1990～2000年) の人権侵害と、大多数のペルー民衆に悲惨と飢餓をもたらしている新自由主義経済政策を日本政府が一貫して支持していることに抗議して行った」と言明。その後、人質を徐々に解放してゆき、翌1997年1月末以降は72人が人質として残された。4月22日、ペルー軍特殊部隊の武力突入によって事件は決着された。合計17人の犠牲者を出す結果となった。内訳はMRTAのゲリラ兵士14人全員、人質となっていたペルー最高裁判事1人、ペルー軍特殊部隊メンバー2人である。その後、この強行突入においてペルー政府がとった事前通告なしの公館への侵入〔ペルー政府は外交関係に関するウィーン条約 (第22条第1項) に違反した (主権の侵害)〕や「処刑問題」に内外から批判が集中した。「処刑問題」とは4月22日に武力突入が行われたさい、少なくとも3人のMRTAメンバーがペルー軍特殊部隊に生きて身柄を拘束されているのが目撃されているが、その直後、

全員殺害されたことをさす。

MRTAはアブラ党を離脱したビクトル・ポライ (Victor Polay Campos) によって1982年に創始され、1984年頃にゲリラ活動を開始した。社会主義とナショナリズムを掲げ、反帝国主義・民主主義闘争を社会主義革命に転化していくという、キューバ型の革命路線を主張。1980年代末の最盛期には数千人の戦闘員を擁していたが、1990年代にはフジモリ政権による治安対策強化策により、事件発生当時にはフニン県チャンチャマヨ郡 (Provincia de Chanchamayo del Departamento de Junín) 内に全勢力を集結した100人程度に縮小していたといわれている。

メンバーの大半は貧困層の出身者であった。1987年10月、サンマルティン県のセルバ (selva) 地域にゲリラ戦線を創出。またフニン県とパスコ県の中央セルバ地帯にも拠点を建設したが、フニン県チャンチャマヨ郡に近いワンカヨ市を除くと、アンデス高地 (シエラ) に重要拠点を築くことはなかったといわれている。活動の場は主にリマ市等の海岸部の諸都市とアマゾン川上流のセルバ地域であった。そのメンバーの大半はフニン県チャンチャマヨ郡、パスコ県オクサパンパ郡 (Oxapampa)、サンマルティン県のセルバ地域出身である。人質となった小倉英敬によると日本大使公邸占拠事件を起こしたMRTA14人中、リーダー格4人のうち3人がリマ出身、1人がクスコ県出身で、あとの一般ゲリラ兵士10人はほとんどが中央セルバ出身であった。この事件の指揮者であったネストル・セルバ・カルトリニ (Néstor Cerpa Cartolini, 「エミヒディオ・ウエルタ司令官 (Comandante Hemigidio Huerta)」と自称) がフニン県で指揮していたゲリラ部隊の名称は「フアン・サントス・アタワルパ (Juan Santos Atahualpa)」であり、事件に参加したMRTAの若者の多くはこの部隊出身であった。女性ゲリラ兵の一人であった「シンシア」はフニン県チャンチャマヨ郡の出身である。彼女は11歳くらいでMRTAに入ったのだという。兄の一人もMRTAに入っているとのことである。またもう一人の女性ゲリラ兵「メリサ」はパスコ県オクサパンパ郡の出身であった。MRTAはアブラ (APRA) 運動から分岐した左派であるMIR (左翼革命運動) に起源を有する。

事件の武力決着を擁護する立場からは、この事件の本質的理解が放棄され、危機管理に発する「国家」の強化を進めようとする政治的主張が全面に押し出されてしまった。MRTAメンバーの生い立ちや略歴はきわめて暗い。生まれた時点から貧困の中で過ごしてきた者が多く、またその貧困や家庭環境が原因で社会的上昇への道が閉ざされていた。

本稿では、この事件発生の本質的歴史的理解にむけて、ペルーにおける原住民 (= 先住民、インディオ) (= 農民) (以下、「原住民」と略称) 問題の発生や展開を考察したのちに、セルバにおける原住民系の人々をとりまく社会環境の悪化、とくに無秩序・貧困問題について、先スペイン期からアシャニンカ [Asháninka. カンパ (Campa) とも呼ばれる] を主とする人々の居住空間であった中央セルバ地域に焦点をあてて歴史的観点から述べる。

ところで、ペルー・中央セルバについての研究であるが、これまであまり取り上げられてこなかった。まだ未知の分野といっている。パナマのスミソニアン熱帯研究所（Smithsonian Tropical Research Institute）のフェルナンド・サントス・グラネロ（Fernando Santos Granero）をはじめ、ペルーやヨーロッパに研究者が分散している。わが国では木村秀雄、石川毅らの研究が知られる。しかし世界的にみても研究者の数はきわめて少ない。研究は一部の地域や時代に限られ、中央セルバ全体を網羅するものでは決してない。これまでの研究対象はフアン・サントス・アタワルパの反乱とか、アラワク系原住民社会の宗教や神話、儀礼などの分析研究が主であった。また人口をはじめ経済、社会に関する統計は、ペルー農業省（Ministerio de Agricultura）やDESCO（Centro de Estudios y Promoción del Desarrollo. 開発研究推進センター）などの機関によって行われている⁽¹⁾。〔以上は「(その1)」より再録〕。

4. 入植活動の再開（1847年から1940年頃まで）

ペルーがスペインから独立し共和国となってからも、中央セルバへの入植活動が再開されたのは遅く1847年になってからである。同年にペルー政府が中央セルバの再征服に着手したことにより、コロノ（colono. 入植者）がチャンチャマヨ川やペレネ川溪谷部に入り資源を探索し始める⁽²⁾。その契機となったのが、1847年にペルー政府がチャンチャマヨ川とトゥルマヨ川（Río Tulumayo）の合流点、現チャンチャマヨ郡サン・ラモン（San Ramón）の地に常設駐屯地すなわちサン・ラモン要塞（el Fuerte San Ramón）を設けたことである。パルカ（Palca）とサン・ラモン間の道路を防衛し、アシャニンカの襲撃からコロノを保護したのであった⁽³⁾。次に政府は1867年までの間にアラワク系原住民の多くをアンデス山脈近くに強制移住させ、原住民を排除した土地にコロノの村落を建設してゆく。1847年のサン・ラモンの建設に続いて、ポスソ（Pozuzo. 1857年）、ラ・メルセ（La Merced. 1869

⁽¹⁾ 「はじめに」の部分については、注をすべて削除した後、本文のみをここに再録した。「付録」・「地図」・「表」の数字は「(その1)」、「(その2)」を通じて通し番号とした。注の数字は、本稿〔(その2)〕では(1)からはじまっている。注の文献表示については、(その1) で出てきたものでも、本稿では詳細を記した。とはいえ読者諸氏には、まず(その1) をご覧いただいたうえで、本稿をお読みいただきたい。

⁽²⁾ 1847年から1985年にかけての中央セルバ再征服の波の拡大については、Fernando Santos Granero y Frederica Barclay Rey de Castro, *Ordenes y desórdenes en la selva central, historia y economía de un espacio regional* (Lima: IFEA, IEP, 1995), p.102. 参照。

⁽³⁾ Michael F. Brown and Eduardo Fernández, *War of Shadows the Struggle for Utopia in the Peruvian Amazon* (Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1991), p.54./Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, pp.57-58. アメリカ人探査者のウィリアム・ヘンダーソンとラードナー・ギボンズはサン・ラモン要塞を次のように描写している。4ポンド砲の砲弾を発射する大砲4基で武装され、48人の兵士が駐屯していると。

年)、サン・ルイス・デ・シュアロ (San Luis de Shuaro.1886年)、オクサパンパ(1891年)、プエルト・ベルムデス(Puerto Bermúdez.1892年)、ビリャ・リカ(Villa Rica.1925年)、サディポ(1927年)などの村が建設されていった〔()の数字は建設年〕⁽⁴⁾。しかしこうした中央セルバ進出計画は当初、原住民の強力な武力抵抗に遭って暗礁に乗り上げ成功しなかった。開発は停滞期に入る。1868年、政府はこの地方を占領するための対策を見直し再度実行に移す。アラワク系原住民を移住させ内外からのコロノの流入通路を確保するべく、以後10か年にわたって6つの大規模な遠征軍をセルバにさし向けた⁽⁵⁾。その直後に中央セルバでは、外部からもたらされた伝染病が流行している(付録3参照)。1880年までにペルー軍は、チャンチャマヨからポスソに至るアンデス山麓沿いに住んでいたアラワク系原住民を制圧していた。フアン・サントス・アタワルパの反乱以来1世紀以上にも及ぶセルバ原住民の自治に終止符が打たれたのである⁽⁶⁾。

その後、軍人に代わって民間人による開発が進められ、大地主を含めコロノの新しい流れがこの地方に定着した。と同時に、フランシスコ会ミッション (misión.伝道区、布教区)の新しい世代がこの地域で活動をはじめ、多くのミッションを建設した。さらにその数年後の1891年には、ペルー政府が英国の投機的資本家主導のもと、ペレネ川沿いの農業コロニー(入植地)設立計画を実行に移すのだった⁽⁷⁾。当時ペルー政府は外資導入による深刻な負債問題に直面していた。リマとラ・オロヤを結ぶ鉄道敷設をはじめとするインフラ開発計画に当初の予想を越えた資金がかかったためである。そこでペルー政府は、ペレネ川沿いの土地50万ヘクタールを「ペルー会社 (Peruvian Corporation)」(1890年にロンドンで結成された英国企業)に譲渡することで負債を埋め合わせようともくろんだ。その結果、英国が所有することになったこの広大な農地は「ペレネ・コロニー (la Colonia del Perené)」(1891年に創設)として一般に知られるところとなった(地図3参照)⁽⁸⁾。ペレネ・コロニーは1893年から土地開発に着手した。そこでの主要生産品は輸出向けの上質なコーヒー

⁽⁴⁾ *Ibid.*, p.77.

⁽⁵⁾ 例えばアルトゥーロ・ウェーザーマンは1876年にペレネ川からタンボ川やウカヤリ川に向けて遠征軍を率いたが、一行はタンボ川流域で原住民の激しい襲撃を受けたという。Brown and Fernández, *op.cit.*, p.56.

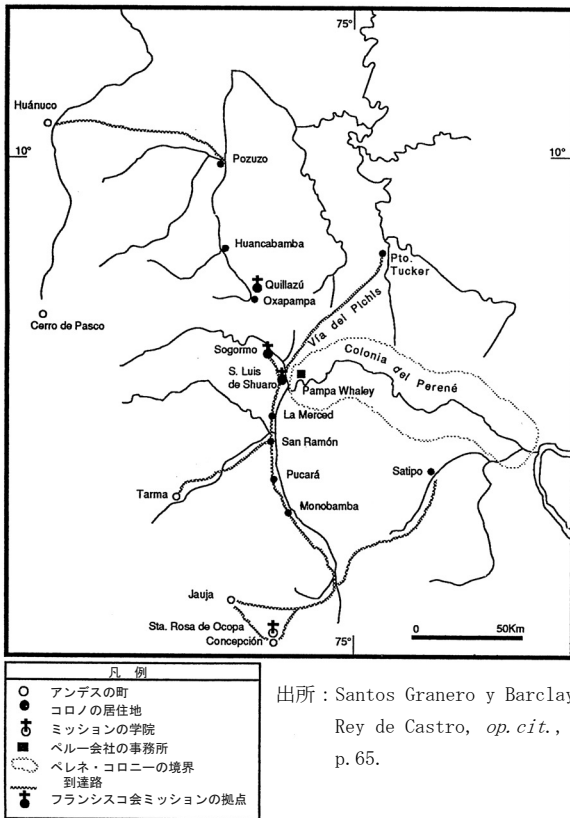
⁽⁶⁾ Fernando Santos Granero, "San Cristóbal en la Amazonia: colonialismo, violencia y hechicería infantil entre los arahuacos de la selva central del Perú." en *Anthropologica*, Año XXIII, No.23 (Lima: Departamento de Ciencias Sociales de Pontificia Universidad Católica del Perú, 2005), pp.52-53.

⁽⁷⁾ *Ibid.*, p.53.

⁽⁸⁾ Lawrence A. Clayton, *W.R. Grace & Co., los años formativos, 1850-1930* (Lima: Asociación de Historia Marítima y Naval Iberoamericana, 2008), pp.137-168./Santiago Túcunán Bonifacio, *Colonia del Perené, presencia inglesa en la amazonía peruana* (Lima: Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina, 2009), pp.24-42.

地図3 1930年、中央セルバのコロノの居住村と

ミッション村、そこへの到達路、ペレネ・コロニーの位置



であり、それは世界市場で高値を呼んだ。1913年には500人のアシャニンカ人がペレネ・コロニーのコーヒー・プランテーション（コーヒー生産の大規模農場）で働いていたとの記録が残されている。またコーヒーの収穫期間だけ臨時に雇用された者を加えるならば、1938年時点でのアシャニンカ人労働者総数は2000人に増えていたといわれる⁽⁹⁾。(いっぽう1907年当時チャンチャマヨ谷にいたコロノの人口は1万4000人との報告がある⁽¹⁰⁾)。

しかしながら、このコーヒー・プランテーションの創設は大きなダメージを当地一帯の原住民に与えたのである。まずもって、原住民の土地が容赦なく収奪されたからである。

さらに原住民の存在自体が、開発を

押し進めるうえで障害とみなされることになり、彼らの多くが暴力的に居住地から追い払われたのであった。さらに後になると、再びフランシスコ会によって集住政策が行われる。大西洋への出口を求めていたペルー政府は、中央セルバへの入植を奨励するべく、数々の法律を制定した。とくにチャンチャマヨ地域では、これらの法律の恩恵を受けてヨーロッパや中国から大量の外国人移民が押し寄せた。とくにイタリア系移民は1930年代まで最も活力あるコロノ集団であった⁽¹¹⁾。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのセルバ地域では、コーヒー栽培のためのプランテーションが本格的に導入されたため、この地域の社会経済構造は一大転換をむかえることとなった。コーヒー生産の拡大に伴い、従来はサトウキビから作った蒸留酒やコカの葉といったセルバ産品の消費地であったシエラであるが、セルバにおけるコーヒー栽培が大規模

⁽⁹⁾ Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op. cit.*, p.71./Brown and Fernández, *op. cit.*, p.56.

⁽¹⁰⁾ *Ibid.*, p.57.

⁽¹¹⁾ *Ibid.*, pp.56-57./Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op. cit.*, pp.61-62.

となるやいなや、セルバの季節労働者の一大供給地と化すのだった〔中央セルバにおけるコーヒーの収穫期（農繁期）は1年のうち3月から7月にかけてである〕⁽¹²⁾。前払いによる一種の強制労働制（enganche）が広がった⁽¹³⁾。なかでも重要な役割を担ったのが英国の債権者が集まって創った「ペルー会社」である。鉄道の敷設や納税面での優遇措置をはじめとしてペルー政府からさまざまな利権を受け取っていたけれども、最大のものは、200万ヘクタールの規模にのぼる土地の支配であった。ペレネ・コロニーでは、20世紀初頭には50万ヘクタールの土地で、その後には合計400万ヘクタールの土地でコーヒー栽培が行われるに至った。このことは、コロニーの土地が増えた分だけアシャニンカの土地が奪われた事を意味している。土地を奪われたアシャニンカ人をはじめ多くの農民がそこでコーヒー栽培に従事したのである⁽¹⁴⁾。（こうした農業の最前線は1920年代以降になるとチャンチャマヨ谷からパンゴア、サティボ、アプリアマック川流域にもおよんでいく⁽¹⁵⁾）。

最後に述べておかねばならぬことがある。1847年になってセルバの静寂が破られ、コロノがセルバに押し寄せるにしたがって、2つの問題が発生していることだ。第一に、またしても伝染病の蔓延が定期化したことである。その一端の詳細は付録3の示すところである。これを見ると、1850年から2000年の間に14件の伝染病（黄熱病、天然痘、麻疹、マラリア、インフルエンザ、コレラなど）の蔓延が理解されるが、とくに1891年以降ペレネ・コロニーの活動が拡大するのにあたかも比例するかのごとく起きていることがわかる。換言するならば、外来者（よそ者）のセルバへの流入に付随して伝染病が発生・流行しているのである。またこれと平行するかのように第二に、付録4のごとくアシャニンカを中心にセルバのアラワク系原住民による反乱、蜂起が頻発していることである。これも両世紀にまたがっており、サン・ラモン要塞、郵便局員、アシエンダ、聖職者、コロニー、コロノ、ミッション、野营地、電信電話局などが攻撃の対象になっていることがうかがえる。また1933年には改宗アシェニンカの殺害（同士討ち）すら発生していることが見て取れる。

まとめ。コーヒー栽培の拡大によってセルバの原住民は、3つの面で大きな影響を受けるにいたった。第一に、自分たちの所有地が奪われたこと、第二に、コーヒーの収穫時に

⁽¹²⁾ *Ibid.*, p.130.その他の作物の収穫期について記すと、アボガドが9～12月、マンダリンオレンジが3～5月、オレンジが6～9月、タンジェリンが1～4月、パイナップルが8～11月である。

⁽¹³⁾ Evan Killick, "Godparents and Trading Partners: Social and Economic Relations in Peruvian Amazonia." *Journal of Latin American Studies*, Vol.40, Part 2, May, 2008, pp.305-306.

⁽¹⁴⁾ Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, p.71./Santos Granero, "San Cristóbal...", (2005), p.53.

⁽¹⁵⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.70-74.参照。

は安価な季節労働者として（シエラの原住民のほかに）アラワク系原住民家族がそのシステムに組み込まれたこと、である。ペレネ・コロニーの場合、多いときにはプランテーションの労働者総数のおよそ35%がセルバの原住民だったといわれている。そして第三に、外来者がもたらす伝染病の甚大な被害を受け、多くの人々が死に追いやられたことである。しかしこれらの事態に対して、セルバの原住民はただじっと手をこまねいてはいなかった。反乱、蜂起という形によって異議の申し立てを行ったのである⁽¹⁶⁾。

Ⅲ 中央セルバにおけるさらなる問題の発生（1940年代以降）

本章では1940年代以降の中央セルバ原住民社会の変化とその実情について見てゆく。「チョロ」化現象、つまりシエラからの人口移動の影響、キューバ革命の影響下で起きた政治的急進化、ベラスコ軍事政権以降の農地改革の結果や反政府武装闘争路線の出現という、三つの項目を考察する。

1. 1940年代以降のペルー社会の「チョロ」化現象（人口の国内移動）

1940年代から始まったペルー社会の「チョロ (cholo)」化現象は、やがてセルバにも重大な影響をもたらすことになる。「チョロ」というこの言葉は紆余曲折するものの、「先住民および先住民に近い混血層の出身で、地方農村部から都市部に流入して、文化的には先住民文化を維持しながら、他方で都市部のクリオーリオ文化に触れて、両者を融合するような文化を形成した底辺層の人々」⁽¹⁷⁾という意味である⁽¹⁸⁾。1940年代から人口の多くが首都リマを中心とするコスタの都市に移動するという現象が起きた。

まずもって、首都リマを中心に沿岸部の都市への人口移動についてみることにする。1940年代には、農村人口の増大と大土地所有の拡大が農地不足を引き起こし、原住民を中心とする農村人口の都市部への移動が始まった。その背景は、第二次大戦中に輸入代替工業化が成長して都市部にも人口吸収力が増大したという事情がある。しかしこの輸入代替工業の成長も、都市部に流入してきた農村人口を吸収しきれなかった。そこでこれらの国内移民の多く

⁽¹⁶⁾ この武力抵抗について詳しくは、*Ibid.*, pp.68-70. 参照。

⁽¹⁷⁾ 小倉英敬『封殺された対話 ペルー日本大使公邸占拠事件再考』（平凡社、2000年）182頁。

⁽¹⁸⁾ チョロに関しては、小倉英敬「現代ペルーにおけるナショナル・アイデンティティ問題—「チョロ」問題の検証—」（『イベロアメリカ研究』、第XVIII巻第1号、1996年度前期、1996年）（43-60頁）や佐々木直美「チョロー都市のインディオ」〔黒田悦子、木村秀雄編『講座 世界の先住民民族 ファーストピーブルの現在 08/中米・カリブ海、南米』（明石書店、2007年）〕（222-235頁）が示唆に富む。

は新しい貧民街を形成し、職業面では露天商などに従事するのだった。1950年代にはリマをはじめとする沿岸部の都市への人口流入が本格化し、丘陵状の空き地が占拠され簡易住宅が建てられていった。これらの住宅街は「バリアダ (barriadas)」と呼ばれた。その後都市部の人口は増加の一途をたどる。1960年代にはリマ市中心部に住居を得られなかった新着の流入者が中心となって、周辺部の国有地や私有地を占拠して簡易住宅街を形成する動きが強まった。この「チョロ」と呼ばれる人々が、都市部において、そして社会全体において主人公になりつつあるのが、過去数十年間におけるペルー社会の傾向である⁽¹⁹⁾。

こうしてペルーでは、表面的には寡頭支配層が政治・経済的に支配しつつも、社会の根底においては大衆層といえる「チョロ」層が主役を演じるという多様性をもつ社会が形成されてきた。山岳部農村における土地不足を背景として生じたアンデス住民の都市への国内移動が、大衆が形成する新たな「近代」をペルーに生じさせた。(ペルーでは工業化が十分発展せず、工業化社会という意味での「近代」は形成されなかった。都市化の主役は「チョロ」である)⁽²⁰⁾。

ところが、都市部における人口受容がやがて飽和状態に達し始める(都市部の雇用創出能力の限界)と、今度はセルバ地域に人々が流出しはじめた。とくにその経済的背景としては、1947年から59年にかけて世界市場におけるコーヒー価格が高騰したことがあげられる⁽²¹⁾。シエラからセルバへの入植者数は増加の一途を辿った。そこでペルー政府は、この入植の動きに注目しはじめ、セルバへの入植が、アンデスにおいて大土地所有が原因で農民に土地が不足している問題に対する解決策になるのではないかと考えだす。しかし、新しい入植者たちはセルバの土地を不法に占拠するようになった。大統領になる前のベラウンデ(Fernando Belaúnde Terry)は『ペルー人によるペルーの征服(La conquista del Perú por los peruanos)』(1959年)なる書物を著したが、これが大きな話題をよび、セルバへの入植に心理面から拍車をかけることになった。ペルー政府にとってセルバは国の問題を解決してくれる未開発の無尽蔵な資源の在処であると考えられた。しかしながら、そこに以前から住んでいた原住民の存在はまったく無視されたままであった。

1963年にベラウンデが大統領になる⁽²²⁾と、彼が自著において主張した入植イデオロギーは国家の公式のものとなった。ペルー政府はセルバ地域の開発を進めるための大動脈として道路建設にいちだんと力を入れた⁽²³⁾。したがって、1965年頃からセルバ地帯に左翼の武

⁽¹⁹⁾ 小倉、前掲書、181-182頁。

⁽²⁰⁾ 同上書、186頁。

⁽²¹⁾ 詳細は、Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, p.66.参照。

⁽²²⁾ 第一期ベラウンデ政権(1963~1968年)。

⁽²³⁾ 1918~1990年、中央セルバにおける道路網の進展は、*Ibid.*, pp.103-104.参照。セルバ高地(selva

力抵抗運動が進出してくると、ペルー政府は開発と安全保障の両面でセルバ地域への影響力を高めようとやっきになった。

1876年から1990年にかけての中央セルバにおける人口規模の推移をチャンチャマヨ郡、サティボ郡、オクサパンパ郡の場合について見ると、人口は増加してきた。詳細は第2表の如くであるが、とくに1960年ごろから急増していることがわかる。例えば、1981年におけるこの3郡の合計は21万2960人であったが、それを1940年（2万1668人）に比較するとおよそ10倍に、また1961年（7万4714人）に比べると3倍に増加していた。また1990年の人口規模は34万7832人へと増加していた。以上から判断すると、これらの地域における人口増加が想像を越えるほど大きいものであったことがうかがい知れるのである（この人口増加を図に表したものが第1図である）。また1972年の時点においてこれら3郡における移民人口と、全人口に占める移民人口の割合を示したものが第3表である。移民人口が占める割合である43.9%はきわめて大きい数字である。あらためてここで注目しておきたい。

1950年代にはシエラ農村部の大土地所有制に基づく諸矛盾が露呈していったが、シエラ農村部からの住民のコスタやセルバへの移動は、その多くの場合が、大土地所有制の拡大に伴って生じた農地不足が背景にあったといわれる⁽²⁴⁾。当時ペルーの土地所有に関して、0.1%の人が耕地の60%以上を所有していたとの見方もある。フニン県やパスコ県では農地の90%が僅か72家族によって所有されていたとの声も聞かれる⁽²⁵⁾。そしてキューバ革命成功の影響を受けて、ペルーでも政治的急進化が生じる。

alta) の多くがアンデス高地（シエラ）から住民「移民」を受け入れたが、その受け手となったセルバを全国的に見ると、まず中央セルバ、次に南部セルバ（プーノ県、クスコ県）、そして北部セルバのワヤガ川中・上流域（el curso alto y medio del río Huallaga、ワヌコ県、サン・マルティン県を横断して流れる）の順になる。1960年代10か年間で過ぎると、入植地でかれらがつくっていた作物（コーヒー、茶、果物、トウモロコシ等）が振るわなくなる。そこで登場してきたのがコカ栽培である。この背景には世界的レベルでのコカイン需要の高まりがあった。そしてやがてペルー・セルバは国際的な麻薬取引網の中に組み込まれたのである。ところで、ここでお断りしておきたい点の一つある。それは、「移民」というこの言葉の意味についてである。ここで言う移民が「コロノ」に当たるのか、それとも「チョロ」なのか？そこに境界線を引くことは事実上むずかしい。本稿では概念分けしてこれらの用語を使っているけれども、実際には両者は重なっている部分が多い。

Carlos Gisberto y otros, *Enciclopedia del Perú* (Barcelona: OCEANO, 2000), p.709.

⁽²⁴⁾ 小倉、前掲書、187頁。

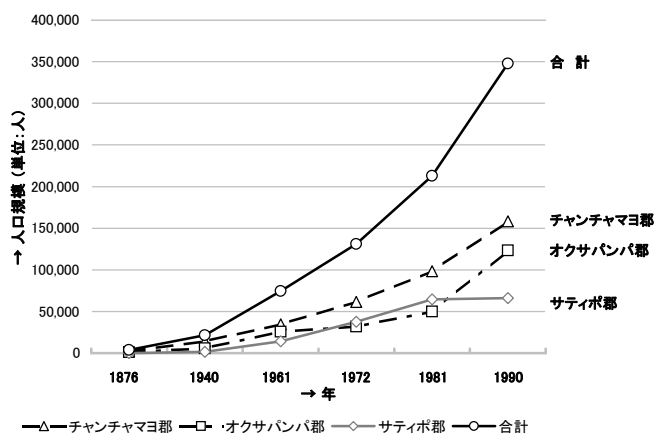
⁽²⁵⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, p.81.

第2表 1876～1990年、中央セルバ3郡における人口規模の推移

郡 \ 年	1876	1940	1961	1972	1981	1990
チャンチャマヨ	2468	14145	34576	61482	98508	158274
オクサパンパ	1265	5881	25783	31794	49857	123533
サティボ	—	1642	14360	37660	64595	66025
合 計	3733	21668	74714	138936	212960	347832

出所：Fernando Santos Granero y Frederica Barclay Rey de Castro, *Ordenes y desórdenes en la selva central, historia y economía de un espacio regional* (Lima: IFEA, IEP, 1995), p.90, p.216.

第1図 1876～1990年、中央セルバ3郡における人口規模の推移



出所：Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, pp.90-91, p.216.

第3表 1972年、中央セルバにおける全人口と移民人口、移民人口の占める割合

郡	全人口 (単位：人)	移民人口 (単位：人)	全人口に占める移民人口の割合 (単位：%)
チャンチャマヨ	61482	30190	49.1
オクサパンパ	39794	14169	35.6
サティボ	37660	17806	47.2
合 計	138936	62165	43.9

出所：Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, p.107.

2. 政治的急進化

キューバ革命が起きる以前からペルーの知識人中産階級はペルー左翼を形成するに至っていた。その思想的ルーツは1928年に刊行されたマリアテギの『ペルーの現実解釈のための七試論』⁽²⁶⁾であった。1950年代、1960年代、ペルーの社会的不正を是正するべく多くの左翼系勢力が育ってくる。1960年代初期になるとペルーの大学では左翼が優勢となっていた。そうした中、民族主義政党であったアブラ党（反帝国主義、反教権等々を主張し、多くの若い知識人を支持基盤にもつ。ペルー労働組合の90%を含む労働者連盟を傘下においていた）が、1956年にプラド政権〔マヌエル・プラド（Manuel Prado y Ugarteche）の第二期政権（1956～62年）〕に癒着して右傾化したことへの反発が起きる。プラド大統領は自政権支持への見返りにアブラ党を合法化。アブラ党のこの和解政策に対して、左翼の考えを学んだ若いメンバーの中に不満が広がり、やがて左派勢力がアブラ党を離脱する。ルイス・デ・ラ・プエンテ（Luis de la Puente Uceda）らを中心とする左派がアブラ反乱派（APRA Rebelde）を結成。これを母体に1961年、左翼革命運動（Movimiento de Izquierda Revolucionaria. 以下MIRと略称）が築かれた。最高指導者はルイス・デ・ラ・プエンテであった。

ルイス・デ・ラ・プエンテの経歴を簡単にみてみよう。1926年、地主の家に生まれる。十代でアブラ運動に参加。1948年に逮捕された後、メキシコに亡命。メキシコにおいてフィデル・カストロに出会う。1954～55年にペルーへ秘密帰国。アブラの急進派に接触。オドリア政権（1948～56年）の打倒を画策し再逮捕される。1956年に釈放。トルヒーヨ大学に学び法学の学位を取得。1959年ハバナで開かれた農業改革会議に出席。1962年からMIRの指揮を執る⁽²⁷⁾。

MIRは思想的にはキューバ革命の影響を受けていた。MIRの中央委員であったリカルド・ガデア(Ricardo Gadea)の姉イルダ・ガデア（Hilda Gadea）が1956年のグアテマラ革命に共鳴して同国に滞在中チェ・ゲバラの最初の妻になったエピソードがある。1965年10月にルイス・デ・ラ・プエンテがゲリラ戦を展開中に戦死し、MIRは組織的に壊滅状態に陥り、活動を停止する。1970年、キューバ派の「叛乱の声」派と中国路線派の「叛乱の声第四期」派の2つに分裂する（MRTAはこの双方が合流して結成された）⁽²⁸⁾。

1959年キューバ革命が成功を収めると、以後、ラテンアメリカにおいては武装闘争路線

⁽²⁶⁾ 邦訳がある。ホセ・カルロス・マリアテギ（原田金一郎訳）『ペルーの現実解釈のための七試論』（柘植書房、1988年）。

⁽²⁷⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.89-90./拙稿「現代ペルーにおける「トゥパック・アマル」イメージについて—日本大使公邸占拠（人質）事件との関係で—」（『人文論集』第33巻、第4号、神戸商科大学学術研究会、1998年3月）178-179頁。

⁽²⁸⁾ 小倉、前掲書、205頁。

が定着し数多くの指導者が出現する。ペルーもその例外ではなかった。ペルーではキューバ型社会主義理論家でチェ・ゲバラの影響を受けたエクトル・ベーハル (Héctor Béjar) が現れ、民族解放軍 (ELN) のリーダーとして1963年からアヤクチョ県ラ・マル郡においてゲリラ運動を指揮した⁽²⁹⁾。ところで、今年はキューバ革命から50年目とあって、日本全国でチェ・ゲバラの映画が2本上映され見る機会があった。また以前に見た映画「モーターサイクル・ダイアリーズ」(青年時代にゲバラが友人と2人でラテンアメリカを旅したもの)の中で1952年にゲバラが、ペルー・アマゾン、サン・パブロ (San Pablo) のらい病病院に赴きそこで働くシーンがあったが、これを見て筆者は、ゲバラの説く革命理論のうちの「拠点 (foco)」論⁽³⁰⁾の発想はこのときの体験から生まれたのではないかと思った。「動く革命的前衛の創出」という考えは、18世紀ペルー・セルバにおいて展開されたフアン・サントス・アタワルパの反乱行動の理念とそっくりのように思えたからである。ペルー・セルバ訪問のさい、ゲバラはフアン・サントス・アタワルパの反乱のことをどこかで聞き及んだのではなかろうか。またさらにチェ・ゲバラとペルー・セルバの接点に関して、ベラウンデ・テリーの1987年の証言から意外な事実が判明する。ベラウンデ・テリーは1962年にペルー・セルバのプエルト・マルドナード (Puerto Maldonado, マドレ・デ・ディオス県 (Departamento de Madre de Dios) の県都。タンボパタ郡 (Tambopata) に位置する。マドレ・デ・ディオス川流域の町。ボリビアに近い) を遊説中、チェ・ゲバラに会ったというのだ。チェは秘密裏にペルー・セルバに来ていたのである。そこに革命拠点を創るために⁽³¹⁾。

1960年代初めの1年間キューバは、1500人のラテンアメリカ人にたいし革命の訓練を行ったが、ペルーの革命家世代は基本的な革命戦術をこの機会に学んだのであった。そこにはエクトル・ベーハル、ルイス・デ・ラ・プエンテ、ギジェルモ・ロバトン、ハビエル・エラウド (Javier Heraudo)、エドガルド・テージョ (Edgardo Tello)、マキシモ・ベランド (Máximo Velando)、リカルド・ガデアらがいた。彼らはチェ・ゲバラの注目を引いた。チェ・ゲバラはとくにエクトル・ベーハルをフィデル・カストロに重ね合わせたという⁽³²⁾。

⁽²⁹⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.82-83.

⁽³⁰⁾ *Ibid.*, p.83-84.

⁽³¹⁾ *Ibid.*, p.84.

⁽³²⁾ *Ibid.*, pp.85-87. ちょうどこの頃クスコ県のセルバで注目を引いた反乱 (1958-62年) があつた。その中心はラ・コンベンシオン溪谷。クスコの北およそ145キロの地点。亜熱帯地域。大規模な原住民シェアクロッパー (物納小作人) を管理する数人の地主に支配されていた地域 (コーヒー・プランテーション) であり、反乱を率いたのは若きトロツキストのウーゴ・ブランコ (Hugo Blanco) であつた。著書は邦訳されている。ウーゴ・ブランコ (山崎カヲル訳) 『土地か死か』

MIRは、1965年からピウラ県、フニン県、クスコ県3か所のセルバを拠点にゲリラ活動を開始する。それぞれのゲリラ部隊の名称は、「マンコ・カパック部隊」、「トゥパック・アマル部隊」、「パチャクテック部隊」であった⁽³³⁾。フニン県中央セルバのトゥパック・アマル部隊で指揮を執ったのはギジェルモ・ロバトン（Guillermo Lobatón Milla.サンボ：黒人と原住民の混血）だった。MRTA（トゥパック・アマル革命運動）の「トゥパック・アマル」なる名称は直接的には、この「トゥパック・アマル部隊」に由来する。ギジェルモ・ロバトンはその指揮者としてアシャニンカに新しいユートピアの理念を伝えた。アンデス高地からMIRのゲリラが到着すると、多くのアシャニンカ人がMIRに参加する⁽³⁴⁾。MIRの指導者ギジェルモ・ロバトンは18世紀の反乱者フアン・サントス・アタワルパになぞらえられた。その底流には至福千年運動の理念がある。植民地主義による権利の侵害によってわき出るところの理念である⁽³⁵⁾。

セルバにおいてゲリラ運動が開始されたとの情報は、ベラウンデ政府に大きな危機感を抱かせることとなった。ただちに政府は、ゲリラ掃討作戦を決意し行動に出る。ペルー政府軍がMIRのゲリラに味方したと判断したセルバ原住民とそこに潜んでいたゲリラを空爆。大勢の死傷者が出た。ギジェルモ・ロバトンもこの空爆によって戦死した。「トゥパック・アマル部隊」は壊滅状態に陥った。そのいっぽうで、中央セルバ住民への懐柔策も打たれることになった。すなわち政府は、ペレネ・コロニーが得ていた権利の無効を宣言したのである。また1963年の農地改革法（ベラウンデ政権期）をセルバに適用するのだった。1965年にペレネ川流域のアシャニンカは自分たちの暮らしにわずかではあるが改善の兆しを見て取った。一方、ロバトンの死後、農場に戻った地主たちは原住民労働者との対立を避けるようになっていた。原住民労働者に対する地主のピストルを振っての虚勢は懐柔的な態度に変わった。しかしだからといって、地主の実体が変わったわけではない。またメスティソのコロノは相変わらず依怙最良によって原住民と接した⁽³⁶⁾。

セルバにおける農村ゲリラ運動は国軍によって即座に鎮圧され、MIRは広範な大衆的基礎をつくり出すことはできなかった。しかし、鎮圧に参加した軍人の間に、農民の貧困問

ルー土地占拠闘争と南米革命』（柘植書房、1974年）参照。

⁽³³⁾ 小倉、前掲書、187-188頁。

⁽³⁴⁾ 付録4の該当箇所参照。

⁽³⁵⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.177-179./ロバトンに関しては、拙稿（1998年）、179-181頁参照。

⁽³⁶⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.205-206,p.216.1965年頃の時点でベルタ川出身のあるシャーマンは、セルバの資源の枯渇、環境破壊に警鐘を鳴らしていた。セルバではアシャニンカの生命の源である熱帯の森が死につつあり、やせた土地が増え、マニオク（manioc,cassava）はなくなり、狩猟用動物であるモンキー、バク、シカ、クマ、鳥類、魚類が減少していると。

題が国の安全保障に大きな害を与えるとの危機感をいだかせた。当時、軍内には、1950年につくられた高等軍事研究所 (CAEM) を中心に、国家安全保障確立のための本格的な国家戦略の研究が進められていた。こうした研究活動の中で理論化を進め、国家危機の意識に目覚めた陸軍左官クラスの急進派将校団が、1968年10月に当時の三軍統合司令官であったベラスコ・アルバラードを担いでクーデターを起こした。その結果、軍事政権が樹立された⁽³⁷⁾。

3. ベラスコ軍事政権以降

1968年以降ベラスコ軍事政権の時代になると、農地改革が本格的に行われ、協同組合方式が導入される。CAPs (Cooperativas Agrarias de Producción. 農業生産共同組合)⁽³⁸⁾や SINAMOS (全国社会動員機構) が組織され作動しはじめる。セルバ地域の統合的な開発計画が進められることになった。

ベラスコ政権はアンデスの共同体をモデルにして、セルバの先住民に対して「原住民共同体法」(法令20653)を1974年に制定する。これが基になり、1970年代後半から1980年代にかけてセルバ地域にはそれまでになかった、自治権をもつ社会的単位として新たな「原住民共同体 (comunidades nativas)」がたくさん創られた⁽³⁹⁾。1976年時点では34の共同体には188ヘクタールから1万ヘクタールを超える規模の不可譲の共同地に関する権利が認められていた。しかしこの措置は、移住者の多いこの地域(第3表参照)に暮らすアシャニンカ人を満足させるものではなかった。認可された土地はきわめて小規模だったからである。政府はまたアシャニンカ共同体に多くの学校や保健所をつくっていった。アシャニンカはこうした法的保護を受け入れはしたが、政府の政策が新たな脅威を生み出すことにやがて気づく。幹線道路の建設はサティボ郡へのコロノの移動を加速するだろう。大規模な農地改革は土地の再分配につながり、土地所有者の変更が行われるだろう。また土地利用の変更はジャングルの森林伐採や環境破壊を招くだろう。さらにそれは農地や牧草地への理不尽な転換に繋がるだろう。このように政府の諸計画がアシャニンカの土地運用理念にうまく適合することはきわめて困難と判断するのだった。事実、軍事政権の対原住民政策は1970年代後期には有名無実化し、農地改革は減速してしまう。アシャニンカ共同体は農

⁽³⁷⁾ 小倉、前掲書、189~190頁参照。

⁽³⁸⁾ 1969~1972年、中央セルバにおける、農地改革の影響を受けCAPsに授与された大農園 (haciendas y fundos) の詳細は、Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, p.86 参照。

⁽³⁹⁾ 1974年~1975年、1988年時点での原住民共同体の状況は、*Ibid.*, p.261, pp.266-267. 参照。

業省に対してあらゆる必要書類を準備し提出したにもかかわらず、すべて反古にされてしまう。アシャニンカは地方連合にかれらの村落をグループ化することで政治的に対抗した。1980年代末には少なくとも8つの地方連合(*federaciones locales*)が数えられている。地方連合は自分たちの不満を政府に提示するための公開討論の場を提供する。また若いリーダー養成の訓練場ともなった。そこで育ったリーダーは二重言語使用能力を備え、やがて伝統的な首長を凌ぐまでになった⁽⁴⁰⁾。

1980年に政府は、世界銀行などによって出資された「ピチスーパルカス特別計画 (Projecto Especial de Pichis-Palcazú)」をペレネ溪谷とその近隣地帯に適用しようとした。この計画の主な目的は、低品質の土壌からハイレベルの生産を行ったり、道路建設をはじめインフラ整備を進めることだった。シエラでは農地改革が急ピッチで進められたにもかかわらず、シエラからセルバへの入植者の波が止まることはなく、セルバにおいてコロノは増え続けた(第2表、第3表)⁽⁴¹⁾。新しい道路の建設(先述)がこれに拍車をかけていた。そして中央セルバにおける耕作地面積の推移について見ると、1984年では1964年に比べて80%増えていた⁽⁴²⁾。(耕作地での栽培品目の第1位は1988年時においてもコーヒーであった⁽⁴³⁾)。だがコロノが押し寄せた結果、アシャニンカの土地は収奪され分断されていく。乏しい農地をめぐる争いの結果、昔から当地に居住してきた農夫が険しい山の斜面に追いやられてしまい、熱帯の豪雨がその薄い表土を押し流すといった事故も発生した。結局、大半の地域で農業生産量は激減したのである。よってこの計画は功を奏することがほとんどなかったといえる。いやそれどころか、実情はそう甘くはない。やがてこの地帯では、地滑りによる森林の消失やむき出しになった急斜面の赤土、深い浸食、地中に吸収されずに

⁽⁴⁰⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.206-207.

⁽⁴¹⁾ チャンチャマヨ郡、オクサパンパ郡、サティボ郡の人口密度は、1940年、1961年、1972年、1981年、1990年が知られる。1981年では1平方キロ当りそれぞれ18.8人、3.2人、3.3人であった。これに比べて1990年ではそれぞれ29.0人、7.03人、3.85人に高まっていた。Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, p.92, p.216. 参照。/1988年から1993年にかけてフニン県への移民人口は著しく増加している。El diario La República, *Gran Atlas del Perú* (Lima: Ediciones PEISA S.A.C., 2005), pp.176-177. 参照。

⁽⁴²⁾ 中央セルバにおける耕作地面積の推移 (単位: ヘクタール)

1964年	1968年	1972年	1976年	1980年	1984年	1964年時と1984年時の比較
74610	101915	105719	102695	113943	134302	80%増

出所: Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, p.115.

⁽⁴³⁾ *Ibid.*, p.120.

流れる雨水だけが目撃されるという悲惨な光景が支配的となるからである⁽⁴⁴⁾。

ペルー・セルバにおけるもうひとつの成長産業はコカインの製造である。コカイン製造の実態やその生産量は表向きの記録には現れない。ペレネ川とその支流から獲れるコカの葉から製造されるコカイン・ペーストがどのくらいの値段なのかもほとんど知られていない。コカ栽培はとくにピチス川、エネ川、タンボ川流域で行われてきた。生産量の面では1970年代にはふるわなかったが、その後急激に増えた。コカが提供する経済的機会が「よそ者」を潤す。そしてこのコカインの販売に深く関係した、SLやMRTAによって繰り返される武装闘争はアシャニンカにとって大きな不安材料となった（第4表参照）。SLは、自らのゲリラ活動方針に従わないアシャニンカ共同体に対する攻撃を強化した。アシャニンカ指導者の定期的な殺害が開始された。例えば1990年4月、SL部隊がサティボ郡ナイランプ（Naylamp）のアシャニンカ村を襲撃したさい40人の原住民が殺害された。アシャニンカが直面したもう一つの不安材料は、MRTAゲリラがアシャニンカの若者を募集し始めたことである⁽⁴⁵⁾。

第4表 1983～1990年、中央セルバにおける政治的暴力事件の発生件数

年 郡	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	合計
チャンチャマヨ	1	4	-	-	-	1	11	5	23
オクサパンパ	1	1	1	-	1	8	6	17	35
サティボ	-	-	1	-	1	3	7	4	16
中央セルバ	2	5	2	-	2	12	24	26	74

出所： Santos Granero y Barclay Rey de Castro, *op.cit.*, p.339.

アシャニンカとMRTAの関係は時代や状況に応じて微妙に変化する。例えば以下のようなケースもある。1989年のこと、MRTAがプエルト・ベルムーデスの近郊でアシャニンカの一リーダーを誘拐した。MRTAはこのリーダーを尋問した。動機は24年前に遡るのだが、1965年のマキシモ・ベランドとフアン・パウカルカハ（Juan Paucarcaja）⁽⁴⁶⁾の逮捕にこのリーダーが手を貸したのではないかという点についての尋問だった。結局このリーダ

⁽⁴⁴⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.207-208.

⁽⁴⁵⁾ *Ibid.*, pp.208-209.

⁽⁴⁶⁾ この両者については、拙稿（1998年）、179頁参照。

一はMRTAによって有罪とされ死刑判決が下され、判決通り死刑が執行されたのだった。ところが今度は、このやり方に激昂したアシャニンカがMRTAに宣戦布告した。同年12月、数百人のアシャニンカ人がプエルト・ベルムデスの町を襲い、MRTAゲリラを支援したとの理由で町役人を拘束。やがて12人のMRTA「容疑者」があぶり出され、身柄を拘束され、人民裁判にかけられた後、一部の者が処刑された。翌1990年1月半ば、アシャニンカの民兵はいまだこの町を制圧していたが、今度は政府が、アシャニンカの手中にあるMRTA「容疑者」を逮捕して町の治安を回復したいとの名目で、ペルー軍を現地に派遣した⁽⁴⁷⁾。これはアシャニンカとMRTAの関係が泥沼化した例である。しかし両者の関係がいつもこうだったわけではない。蜜月の関係だったこともある。

時代が進むに従ってアシャニンカ社会では階層化が進み、地域差はあるもののその社会は大きく変容を強いられた⁽⁴⁸⁾。

他方、セルバに到着していたコロノの間でも階層化が目立ち、とくに最底辺層の人々を包む社会的生存環境は悪化の一途を辿ったといっている。

アシャニンカ原住民共同体員のうちとくに若年層がMRTAの運動に共鳴しこれに合流した可能性が高い。また「チョロ」としてセルバに入植していたコロノのうち、とくに社会的上昇の機会が閉ざされていた最底辺層がMRTAの仲間入りを果たしたにちがいない。中央セルバにおいては基本的にこの2つの流れがMRTAの支持基盤になったものと考えられる⁽⁴⁹⁾。

IV 結び

ペルー日本大使公邸占拠事件はペルー軍の強行突入によって閉幕され、合計17人の犠牲者を出す結果に終わった。主権の侵害（ウィーン条約違反）が発生したことに加え、「処刑問題」に示されたごとく国家による人権侵害がここでも再発した。この決着方法によって、今回の事件が提起していた問題の本質は解決したのであろうか。否である。この事件が起きた背景には、スペインからの独立以降共和国ペルーにおいて放置されてきたいくつもの社会問題が横たわっている。その一つに、今回のゲリラ兵の出身地である中央セルバの無秩序と不安定、貧困問題がある。ペルーの中でも周辺部に位置するセルバは元来資源も豊富で豊かな富んだ地域であったにもかかわらず、外因によって社会的・経済的・政治的無秩序や貧困状態に陥れられてきた。インカの支配が（直接的には）及んでいなかった

⁽⁴⁷⁾ Brown and Fernández, *op.cit.*, pp.209-210.

⁽⁴⁸⁾ *Ibid.*, p.210.

⁽⁴⁹⁾ *Ibid.*, pp.207-210.

セルバへは、植民地時代18世紀になって、「教権」に続き「俗権」の手が本格的におよび始めた。しかしフアン・サントス・アタワルパの反乱によってスペイン人は中央セルバから追放されてしまう。その後長期にわたってこの地域への入植活動が中止され、秩序が回復されたかにみえた。しかし1847年になってペルー政府主導の下で再征服が開始される。19世紀末になると英国資本の下でペレネ・コロニーが立ち上げられ、国際市場におけるコーヒー価格の高騰を背景に以後コーヒー・プランテーションが拡大してゆく。これを契機にセルバへのコロノの進出が加速した。そして20世紀半ば以降になると「チョロ」化の波、つまり人口移動の波が中央セルバへも押し寄せてきた。植民地時代から今日までセルバでは「よそ者」が到来するたびに伝染病が流行し多くの被害者が出るという悪循環に見舞われてきた。1980年代に入るとセルバの原住民をはじめとして、人々の暮らしが立ちゆかなくなってきた。農地改革に代表されるごとく政府が打ち出した改善策も功を奏することがなかった。それどころか、開発による弊害、言い換えると森林の消失に端的に見られたごとく環境破壊が深化した。いっぽうで、外部から到来していたコロノとアシャニンカとの間には紛争が絶えなかった。他方、1970年ごろからコカインの製造に注目が集まると、「セルバ」イコール「エル・ドラード」かといったイメージが再燃しかけた。だがそれは一部の者を潤したにすぎない。

1960年代からセルバの貧困大衆の間では武装闘争路線を受け入れる素地が形成されていた。1980年代に入ると、SLならびにMRTAの武装闘争路線がセルバに入ってきた。アシャニンカの間から、かつての秩序を取り戻そうとゲリラに身を投じた者が続出したとしても、不自然とは言えまい。MRTAについていうと、これを支援したのはアシャニンカのうちのとくに若年層ではなかったろうか。また「チョロ」としてセルバに入植していたコロノのうち、とくに社会的上昇の機会が閉ざされていた底辺層の人々がこれに共鳴した可能性が濃厚といえる。

最後になったが、日本大使公邸占拠事件に参加していた中央セルバ出身の2人の少女ゲリラ兵のことが追想される。一人目は、4月22日の強行突入時にペルー軍特殊部隊に生きて身柄を拘束されたが、その直後、軍によって殺害されたシンシア。事件当時は16歳くらいで、幼少の頃父親が失踪してしまい最貧困母子家庭に育ったという。二人目が最年少の少女メリサ。年齢はシンシアと同じくらいだったという。占拠期間中公邸に差し入れられたカップラーメンを、故郷にいる母親に食べさせようと思って、1個か2個くすねていたところをゲリラ指揮官に見つかり、ひどく叱咤され、以来すっかり落ち込んでしまったという。セルバの社会問題、さしあたって無秩序・貧困問題の改善がペルーにとって最優先課題である。

付録3 1850年～2000年の中央セルバにおける伝染病の流行

1879～1880年：黄熱病と天然痘が混じり合った伝染病がワンカバンバ(Huancabamba)溪谷とチョロバンバ(Chorobamba)溪谷のヤネシャを襲い、その集団を破壊した。

1881年：麻疹の流行がチョロバンバ溪谷のキリヤス・ミッション (la misión de Quillazú) の改宗ヤネシャ (los conversos yáneshas) を直撃。このミッションは同年につくられたものであった。

1885年：天然痘の流行がウカヤリ川上流を襲いコニボに打撃を与えた。この地域に住んでいたアシヤニンカにも影響を与えた。

1906年～：マラリアが発生してチャンチャマヨ溪谷やペレネ川上流のヤネシャやアシヤニンカの人々が大量に死亡。

1910年：麻疹の流行によりピチス川やアブルカヤリ川 (río Apurucayari) のアシヤニンカが大量に死亡。

1918年：インフルエンザが世界的に流行し2千万人以上が死亡。それは中央セルバにも及んだ。

1928年：数百人が麻疹で死亡。その後、1928年のメシア運動の展開期にほかの病気がペレネ川の再臨派ミッションを直撃。

1933年：新たに麻疹の流行がペレネ川上流域のヤネシャとアシヤニンカに及び、スツィキ (Sutziki) の再臨派ミッションの120人から300人の原住民改宗者が死亡した。

1937年：チャンチャマヨ谷とペレネ川上流域でマラリアが発生。ヤネシャとアシヤニンカが受難。

1939年：麻疹の流行でペレネ川上流域のヤネシャとアシヤニンカの人々が大量に死亡。

1948年：麻疹の流行がペレネ川上流域のエネニャス (Eneñas) やユリナキ (Yurinaqui) 地帯のヤネシャを襲った。

1956年：特定できない伝染病がペレネ川上流域のユリナキ地帯のヤネシャを襲撃。ポンゴア川上流ならびにアナパティ川 (el Anapati) 流域に住むノマチゲンガ人の50%が死亡した。

1964年：麻疹の強い流行によってグラン・パホナル台地のアシヤニンカが壊滅した。

1992年：コレラと麻疹の流行がエネ川とペレネ川下流のアシヤニンカに打撃を与えた。

出所： Fernando Santos Granero, "San Cristóbal en la Amazonía: colonialismo, violencia y hechicería infantil entre los arahuacos de la selva central del Perú." en *Anthropologica* (del Departamento de Ciencias Sociales de la Pontificia Universidad Católica del Perú), Año XXIII, No.23, diciembre de 2005, p.71.

付録4 1850年～2000年の中央セルバにおける原住民反乱の一覧

1862年：アシヤニンカがチャンチャマヨへの道路沿いやサン・ラモン要塞 (el Fuerte San Ramón) 近くのアシエンダに定住していたコロノを襲撃。

1864年：アシヤニンカがチャンチャマヨ谷のアシエンダにいた20人以上を処刑した。そしてサン・ラモン要塞の軍と交戦。

1869年：アシヤニンカが郵便局員、ラモン要塞の武装護衛兵ならびにニハンダリス (Nijandaris) の軍野営を襲撃。

1888年：一人のアマチェガ人 (un amachegua) とパドレ・ソル (Padre Sol) の使者と称する白人が出現したとのニュースに引き寄せられた、ピチス川とウカヤリ川のアシヤニンカがサクラメント・パンパ (las Pampas del Sacramento) に集結した。

1896年：ペレネ、タンボ、パンゴアの各溪谷に住むアシヤニンカ (アシェニンカ)、ノマチゲンガが、パンゴア・ミッション (la misión de Pangoa) にいる聖職者やコロノを追放するために兵力を集結した。

1897年：ポンゴアの谷に出現した神の使者であるアマチェグア (un amachegua) によって鼓舞され

たアシャニンカとヤネシャが、チャンチャマヨやセロ・デ・ラ・サル、ペレネ川のコロニーに定住していたコロノに対して蜂起した。

1898年：キリヤス・ミッション (la misión de Quillazú) のヤネシャがパルカス川 (río Palcazu) 流域にいた同胞とともにオクサパンパ溪谷のコロノを排撃しようとした。

1913～1914年：アシャニンカがピチス川の中央道路沿いにある多くの野営地や電信電話局を襲撃した。またピチス川にあるプエルト・イエスプ (Puerto Yessup) ・コロニーに火を放ち略奪。さらにアブルカヤリ川 (río Apurucayali) のカワパナス・ミッション (la misión de Cahuapanas) を破壊した。

1928年：ペレネ川とタンボ川の各溪谷にいた大勢のアシェニンカとアシャニンカが再臨派宣教師 (los misioneros adventistas) の演説中に靈感を与えられ宗教運動に合流。再臨派宣教師は白人社会の破壊とメシアの到来を約束していた。

1933年：ペレネ川のアシェニンカがスツィキ (Sutziki) の再臨派ミッションを襲撃。改宗アシェニンカ (los conversos ashéninkas) を殺害した。ペルー人に協力したことが原因であった。サン・ラモンの攻撃を予告・脅迫した。

1960年：プロテスタントの宣教師ワーナー・ブルナー (Werner Bulner) がエネ川に一つのミッションを設立。サティポ地域の大勢のアシャニンカを魅了した。アシャニンカ人たちは彼こそ「イトミ・パヴァ (Itomi Pavá)」、つまり「太陽の息子 (el hijo del Sol)」にちがいないと確信した。

1965年：サティポとパンゴア両溪谷の大勢のアシャニンカとノマチゲンガがMIRのゲリラ運動に結集した。

1989～1995年：1980年代10か年間の初めに大勢のアシャニンカとヤネシャが、SLやMRTA党派への結集を強いられた—もしくは自発的に結集したかもしれない—。1989年以降、自己防衛のための武装グループへの組織作りに着手した。自分たちの土地から彼らを追放するために。1995年頃、この組織化を終了した。

出所： Fernando Santos Granero, "San Cristóbal en la Amazonía ...", pp.72-73.

参考文献

Amich, José, *Historia de las misiones del convento de Santa Rosa de Ocopa* (Lima: Milla Batres, 1975).

アンドリース、キャロル「たたかう女たち」〔カルロス・イバン・デグレゴリほか (太田昌国、三浦清隆訳) 『センデロ・ルミノソーペルーの〈輝ける道〉』 (現代企画室、1993年) 〕

Angelis-Harmening, Kristina, *Intercambio y verticalidad en el siglo XVI en los yungas de La Paz* (Saurwein: BAS=Bonner Amerikanistische Studien, Universität Bonn, 2000).

Benavides, Margarita (edición general y textos), *Atlas de comunidades nativas de la Selva Central* (Lima: Instituto del Bien Común, 2006).

ブランコ、ウーゴ・ (山崎カヲル訳) 『土地か死か ペルー土地占拠闘争と南米革命』 (柘植書房、1974年)

ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察
—ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて—（その2）

Brack Egg, Antonio, Bravo Tecsí, Fernando, *Perú legado milenario* (Lima: Universidad de San Martín de Porres, 2005).

Brown, Michael F. and Fernández, Eduardo, *War of Shadows the Struggle for Utopia in the Peruvian Amazon* (Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1991).

Departamento de Creación Editorial de Lexus Editores, *Gran enciclopedia del Perú* (Barcelona: Lexus Editores, 1998).

El Comercio, *La crisis de los rehenes en el Perú base Tokio* (Lima: El Comercio, 1997).

El diario La República, *Gran Atlas del Perú* (Lima: Ediciones PEISA S.A.C., 2005).

Flores Galindo, Alberto, *Buscando un inca: identidad y utopía en los Andes* (Lima: Editorial Horizonte, 1988).

Gisberto, Carlos y otros, *Enciclopedia del Perú* (Barcelona: OCEANO, 2000).

González Ochoa, José M., *Atlas histórico de la América del descubrimiento* (Madrid: Acento Editorial, 2004).

石川毅「アシャニンカ アンデス山脈中部の東斜面の先住民」〔黒田悦子、木村秀雄編『講座 世界の先住民族 ファーストピープルの現在 08/中米・カリブ海、南米』（明石書店、2007年）〕

Killick, Evan, "Godparents and Trading Partners: Social and Economic Relations in Peruvian Amazonia." *Journal of Latin American Studies*, Vol.40, Part 2, May, 2008.

真鍋周三著『トゥパック・アマルの反乱に関する研究—その社会経済史的背景の考察—』（神戸商科大学研究叢書LI, 神戸商科大学経済研究所, 1995年11月）

—「現代ペルーにおける「トゥパック・アマル」イメージについて—日本大使公邸占拠（人質）事件との関係で—」（『人文論集』第33巻, 第4号, 神戸商科大学学術研究会, 1998年3月）

—「16世紀ペルーにおけるスペイン植民地支配体制の成立をめぐって」（『人文論集』第39巻, 第3・4号, 神戸商科大学学術研究会, 2004年3月）

マリアテギ、ホセ・カルロス（原田金一郎訳）『ペルーの現実解釈のための七試論』（柘植書房、1988年）

村上勇介『フジモリ時代のペルー』（平凡社、2004年）

ネルソン・マンリケ「恐怖の時代」（カルロス・イバン・デグレゴリほか、前掲書）

小倉英敬「現代ペルーにおけるナショナル・アイデンティティー問題—「チョロ」問題の検証—」（『イベロアメリカ研究』、第XVIII巻第I号、1996年度前期、1996年）

—『封殺された対話 ペルー日本大使公邸占拠事件再考』 (平凡社、2000年)

太田昌国『「ペルー人質事件」解説のための21章』 (現代企画室、1997年)

—「〈解説〉ペルーと日本を往復する私的回想をまじえて」〔カルロス・イバン・デグレゴリほか、前掲書〕

大貫良夫他監修『ラテン・アメリカを知る事典』 (改訂・増補版) (平凡社、1999年)

大貫良夫、木村秀雄編著『文化人類学の展開 南アメリカのフィールドから』 (北樹出版、1998年)

Patriau, Gustavo Faverón, *Rebeldes sublevaciones indígenas y naciones emergentes en Hispanoamérica en el siglo XVIII* (Madrid: tecnos, 2006).

Prada, Federico Richter, O.F.M., "Los franciscanos en la evangelización del Perú, siglo XVI." en *Revista Peruana de Historia Eclesiástica*, 2 (Cuzco, 1992).

Santos Granero, Fernando y Rey de Castro, Frederica Barclay, *Ordenes y desórdenes en la selva central, historia y economía de un espacio regional* (Lima: IFEA, IEP, 1995).

Santos Granero, Fernando y Rey de Castro, Frederica Barclay(editores), *Guía etnográfica de la Alta Amazonía*(Volumen V, Campa Ribereños Ashéninka)(Lima: Instituto Smithsonian de Investigaciones Tropicales, Instituto Francés de Estudios Andinos, 2005).

Santos Granero, Fernando, "Las fronteras son creadas para ser transgredidas: magia, historia y política de la antigua divisoria entre Andes y Amazonía en el Perú." en *Histórica*, XXIX, 1, 2005.

— "San Cristóbal en la Amazonía: colonialismo, violencia y hechicería infantil entre los arahuacos de la selva central del Perú." en *Anthropologica*, Año XXIII, No.23 (Lima: Departamento de Ciencias Sociales de Pontificia Universidad Católica del Perú, 2005).

— "Paisajes sagrados arahuacos: nociones indígenas del territorio en tiempos de cambio y modernidad." en *Revista Andina*, vol.42, primer semestre del 2006.

Lawrence A. Clayton, *W.R. Grace & Co., los años formativos, 1850-1930*(Lima: Asociación de Historia Marítima y Naval Iberoamericana, 2008).

Bonifacio, Santiago Tácunan, *Colonia del Perené, presencia inglesa en la amazonía peruana* (Lima: Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina, 2009).

佐々木直美「チョロー都市のインディオ」 (黒田悦子、木村秀雄編、前掲書)

ペルー・中央セルバの無秩序・貧困問題の歴史的考察
—ペルー日本大使公邸占拠事件の本質的問題の究明にむけて— (その2)

Tamayo Herrera, José , *Historia del indigenismo cuzqueño, siglo XVI-XX* (Lima: Instituto Nacional de Cultura, 1980).

Varese, Stefano , *La sal de los Cerros. una aproximación al mundo Campa* (Lima: Retablo de Papel, 1973 (Segunda edición)).

Velez, Armando Nieto , S.J., "Las misiones en los jesuitas del Perú." en *Revista Peruana de Historia Eclesiástica*, 2 (Cuzco, 1992).